

# Ocean Breeze

Newsletter of the Atmosphere and Ocean Research Institute  
The University of Tokyo

2011

夏

第5号

## CONTENTS

- 02 特集  
ウナギを追って  
世界初、天然ウナギ卵を発見した研究室  
「ウナギ帝国」の歩み
- 04 大槌レポート／  
震災対応研究航海の緊急公募に関して
- 05 受賞／書き手自身による新刊紹介／  
研究よもやま話
- 06 イベントレポート／人事異動一覧
- 07 AORI スタッフ日誌
- 08 新スタッフ紹介



江戸末期の浮世絵師・歌川国芳による「東都宮戸川之図」(部分)個人蔵。  
宮戸川(現在の隅田川)におけるウナギ捕りの様子が描かれている。



# ウナギを追って

## 世界初、天然ウナギ卵を発見した研究室「ウナギ帝国」の歩み

塚本 勝巳 (海洋生命科学部門 教授)



「動物はなぜ旅をするのか？」これが私たち行動生態研究室(海洋生命科学部門)の中心テーマです。サケやウナギなど、一生の内に海と川を行き来する「通し回遊魚」と呼ばれる魚たちがいますが、その旅のメカニズムや理由はまだよくわかっていません。はるか彼方の目的地までどうして正確に行き着くことができるのか、何が引き金となって回遊が始まるのか、太古の昔、回遊を始めた最初の一匹はどんな個体だったのか、想像するだけでもわくわくしてきます。なかでも魚がなぜ回遊するか、その理由を考えることは回遊研究の究極目的ともいえ、動物の旅の真髄を理解することにつながります。

### 「ウナギ帝国」の誕生

私たちの回遊研究は最初アユから始まりました。その後、サクラマスやウナギなど様々な回遊魚に広がっていきました。これらはそれぞれ異なる回遊パターンをもつため、相互に回遊生態を比べることで魚がなぜ回遊するのか、その共通の理由がわかるのではないかと考えたからです。しかし、回遊研究が進むにつれて、次第にウナギ研究が主となり、ウナギを研究する学生が増えていきました。ほかの魚は数年間ほど研究したり、文献を調べたりすることで、回遊生態のあらましを知ることができましたが、ウナギの生態には謎の部分が多く、やるべき課題がたくさんありました。

研究テーマは、ウナギの生活史のあらゆる発育段階に広がっていきました。研究船白鳳丸を使った外洋の産卵場調査、レプトセファルスと呼ばれる幼生の初期生活史、シラスウナギ(稚魚)の接岸生態、淡水生活期の「黄ウナギ」の成長、あるいは産卵場に戻っていく「銀ウナギ」の回遊生態など、さまざまなテーマをみなが分担して受け持ちました。なかには江戸時代から美味として名高い、幻の「アオウナギ」がどうして生じるのか調べた学生もいます。大規模プロジェクトである産卵場調査は、全国の研究者と協力して、主に私(塚本)が取り組みました。研究室の学生たちも産卵場調査航海に参加し、船上作業や試料解析に大活躍しました。

研究対象は、さらに世界中のウナギに広がっていきました。調査の範囲はウナギの分布中心ともいえる東南アジアはもちろんのこと、欧米、アフリカ、オセアニアにも及びました。ウナギの研究活動を通じて、強固な国際研究ネットワークも構築されていきました。こうして世界でも珍しい、ウナギという単一の生物を対象にして、その全てを理解しようという研究室、通称「ウナギ帝国」が誕生したのです。

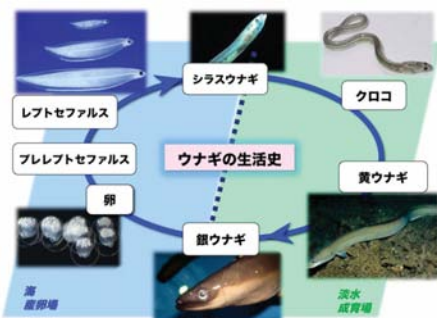


ニホンウナギの回遊経路

### 「ウナギ帝国」の収穫

「ウナギ帝国」では研究対象はウナギひとつに絞りましたが、ウナギのあらゆる研究分野であらゆる研究手法を用いることにこだわりました。世界中の海洋・河川における野外調査はもちろんのこと、遺伝子解析、耳石に含まれる微量元素の分析、ポップアップタグ放流、数値シミュレーション解析など、さまざまな先端手法をいち早く取り入れ、回遊生態に限らず、分類、形態、系統、進化、集団、生理、行動、資源など、ウナギのすべてについて研究が行われたのです。その結果、ウナギの分類、系統、進化、集団など生物学的な基礎知見から、川に上らず一生涯で過ごす「海ウナギ」の発見や、ニホンウナギ親魚が水深200mと600m層のあいだで規則正しく日周鉛直移動しながら産卵回遊すること、さらには産卵地点の緯度が日本にやってくるシラスウナギの資源量に大きく影響することなど、生態学的、資源学的にきわめて重要な新発見が数多く得られました。1994年の「ウナギ帝国」建国後

17年間に得られたウナギの理解は、それ以前の100年をはるかに凌駕するものといえます。(→トピック1～3)



ポップアップタグ。親ウナギの産卵回遊中の遊泳水深と水温を記録して海面に浮上し、人工衛星経由でデータを地上に送ってくる。

### 「ウナギ帝国」を超えて

これまでに「ウナギ帝国」を巣立っていった50名の学位取得者の研究成果を総合してみると、「なぜ旅をするか」という問いの答えがおぼろげながら見えてきます。つまり、動物はそれまでいた環境に不具合を感じ、そこから「脱出」する、これが動物の回遊の始まりであり、旅の最大の理由と考えられます。

魚の回遊研究から得られたこの「脱出理論」は、いまだ仮説で、今後さまざまな角度から検証が必要ですが、鳥や陸上動物の移動にもよくあてはまります。7万年前に起きた人類のアフリカ脱出、モーゼの出エジプト、ゲルマン民族の大移動、最近ではポートビールの例など、意外にもわれわれ人間の旅や移動の理由も説明できる仮説ではないかと、一人ひそかに悦んでいます。



白鳳丸突真のデッキで観測の合間の団らん

### トピック1 アオウナギ

江戸の昔から全国各地に極上の味のウナギ伝説が残っています。岡山県児島湾でアオウナギと呼ばれる幻のウナギの研究が始まりました。その名の通り体色は目の覚めるような青緑です。河川で獲れるウナギに比べ、頭部は小さくやや尖っていますが、体はよく太っています。遺伝子解析の結果、普通のウナギとアオウナギのあいだに差はなく、同種同集団のものであるとわかりました。海水と淡水が混ざり合う干潟でアナジャコを専食し、とくに成長の早いウナギの中からアオウナギが生じてくることもわかってきました。



ウナギ蒲焼きの歴史は古く、江戸中期にまでさかのぼる。ウナギ捕りの図が浮世絵に散見される。(表紙参照)



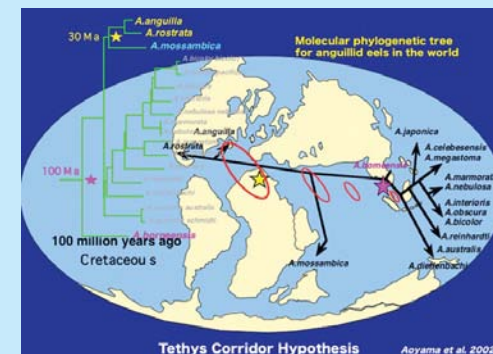
児島湾汽水域で獲れたアオウナギ(右)と非アオウナギ(左)



児島湾におけるアオウナギの調査。スッポンと呼ばれるウナギ筒を多数しかけ、分布、成長、食性などウナギの生態を調べる。

### トピック2 ウナギ新種発見

熱帯ウナギの研究は「ウナギ帝国」の誇る研究のひとつです。世界中のウナギ全種を集めて、分子系統解析を行い、ウナギの起源と進化の過程を調べます。熱帯各地で海外学術調査を行うなかで、いままで見たこともない塩基配列を持ったウナギがフィリピン・ルソン島で見つかりました。形態と遺伝子を詳しく調べた結果、これが新種であることがわかりました。*Anguilla luzonensis*と命名し、世界で19番目の新種ウナギとして報告しました。



第19番目のウナギ・新種 *Anguilla luzonensis*



タヒチの山奥で現地の人々の助けを得てウナギの採集を行う。

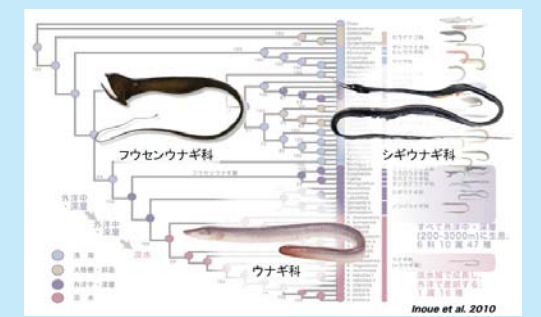


新種の採集にはフィリピン・ルソン島の原住民ネグリートの一家が協力してくれた。

世界のウナギ全種を集めて、分子系統解析を行ったところ、ウナギは今からおよそ1億年前の白亜紀、現在のボルネオ島付近の海産魚を起源として生まれ、世界中に広がっていったものと推定された。西へ向かったものは、スエズ地峡が形成される以前に古代のテティス海を経て大西洋に侵入し、ヨーロッパウナギとアメリカウナギへ種分化していったらしい(テティス海仮説)。北へ向かったものの中から、やがてマリアナ沖に産卵場をもつニホンウナギが誕生した。

### トピック3 ウナギの深海魚起源説

アナゴ、ウツボ、ウミヘビなど全19科のウナギ目魚類を網羅的に採集し、ミトコンドリアDNAの全塩基配列に基づいて分子系統解析を行ってみると、ウナギにもっとも近縁のものは深海に生息するフウセンウナギ科やシギウナギ科の魚類であることがわかりました。ウナギ目魚類の太古の祖先は、おそらく最初沿岸域で派生し、外洋の中深層へ進出していったものと考えられます。その後、これら深海魚との共通祖先から袂を分かって沿岸・淡水域へ入るようになったものが、海と川のあいだで回遊する現在のウナギになったと考えられます。その名残として、ウナギは今でもはるか外洋の深い海の産卵場まで帰っていかなければならないのでしょう。



ウナギ科(下)と近縁のフウセンウナギ科(左上)とシギウナギ科(右上)の魚類。これらはいずれも外洋の中深層にすむ。



## 大槌湾の物理化学環境およびプランクトン調査(速報)

福田 秀樹(国際沿岸海洋研究センター助教)

所内プロジェクト「大槌湾を中心とした三陸沿岸復興研究」の一環として、漁船を備船して、5月26～27日に大槌湾での観測を実施しました。今回の調査では、湾内での河川水の挙動の変化の有無を検討するとともに、栄養塩環境や有機物の分布、またプランクトンや微生物の生物量についての基礎的データを取得することを目的としました。詳細な分析結果はまだ得られていませんが、本調査を通して気がついたことを速報的に報告します。

湾奥に位置する鶴住居川の河口付近が大きく破壊されており、また、観測に協力いただいた漁師さんの話では、震災前と比較して湾の中央部付近で水深がかなり深くなっているといえます。今後、河口域や湾内の地形の変化を精査し、それが生態系にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることは重要な課題です。

鶴住居川の河口付近にはアマモ場が形成されていましたが、津波により海岸の砂浜自体が消滅した状態です。津波による

生息場所の破壊のあと、生物多様性や水産資源が回復していく様子を克明に追跡し、そのメカニズムを明らかにしていくことは、生態系の再生や水産業の復興のうえで重要な研究課題です。

津波の際に様々な人工物が海に引き込まれていきましたが、被災地から急ピッチで撤去されている瓦礫は分別されることなく海辺の空き地に積み上げられ続けています。これらから化学物質等が沿岸域に流出することが懸念されるため、早急に監視体制を確立するとともに、長期的な注視と監視を行うことが必要です。

本記事を執筆している段階で国際沿岸海洋センター本館内の瓦礫の撤去はすでに終了し、被害の少なかった3階では電気・水道が使える状態にまで復旧しました。7月末には新たな観測用の船艇も利用可能となる予定であり、センターの研究機能は着々と復旧しつつあります。我々は今回採取した試料の分析を進めるとともに、調査・観測をさらに展開し、震災による

沿岸海洋生態系への中長期にわたる影響の把握、そして東北地方の豊かな沿岸生態系の復活に貢献すべく努めたいと考えています。



調査に備船した妙法丸。センターが立地する大槌町赤浜地区の漁師さんの所有する8人乗りの作業船で、3月11日の大震災の際には湾内で大津波に遭遇したものの、難を逃れることができたとのこと。



瓦礫の撤去が終了したセンター3階の共同利用研究室。震災直後は什器類が出入口を塞いだ状態だったが、これらは撤去され、清潔な状態に復旧した。割れた窓ガラスも新しいものに交換され、精密機器類の保管も可能になっている。

## 震災対応研究航海の緊急公募に関して

蒲生俊敬(海洋化学部門教授、研究船運航部会長)

東北地方太平洋沖地震の発生に伴い、海洋科学を取り巻く情勢が大きく変化しました。地震に関連する地学的研究、津波による沿岸生態系の損傷と回復に関する研究、福島第一原子力発電所からの海洋放射能汚染に関する研究など、今まさに対応すべき緊急課題が多数発生したからです。研究船共同利用運営委員会および研究船運航部会は、学術研究船共同利用研究のボトムアップの仕組みを生かしながら、これらの問題に対処する方策を模索しました。まず、本年度採択されている各航海の主席研究員に、観測日数の提供、試料採取協力、観測海域変更など可能かどうかアンケート調査を行い、提供された観測日数を元手に、震災対応研究航海の緊急公募を実施しました。11件の応募があり、運航部会の審査を経て全件採択し(1件はその後応募取り下げ)、表に示したような航海スケジュール

を策定することができました。運航日数の供出などでご協力いただいた研究者の方々、および航海計画の変更にも柔軟に対応して下さったJAMSTEC運航管理部の方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

他にも、ハワイ大学R/V Kaimikai-O-Kanaloa、東京海洋大学「海鷹丸」、東海大学

「望星丸」、JAMSTEC研究船などを用い、震災に関連した研究航海が次々と立案・実施されつつあります。これらの航海および研究者との有機的な連携を図ることによって、限られた観測の機会を有効に活用したデータ取得を図り、社会に貢献できると確信しています。

### 平成23年度 学術研究船 震災対応研究航海

航海名	出 港		入 港		海 域	日数
	月 日	港	月 日	港		
KT-11- 5	4月13日	東京(台場)	4月22日	東京(台場)	遠州灘・房総	10
KT-11- 6	4月25日	東京(台場)	5月 4日	函館	震災対応海域	9
KT-11- 7	5月 7日	函館	5月13日	函館	北海道南東	7
KT-11-16	7月19日	清水	7月23日	東京(台場)	震災対応海域	5
KT-11-17	7月29日	東京(台場)	8月 5日	八戸	震災対応海域	8
KT-11-21	8月27日	八戸	9月 3日	東京(台場)	震災対応海域	8
KT-11-22	9月 5日	東京(台場)	9月13日	東京(台場)	震災対応海域	9
KT-11-27	10月26日	東京(台場)	11月 3日	東京(台場)	震災対応海域	9
KT-12- 1	3月 4日	東京(台場)	3月 9日	東京(台場)	震災対応海域	6
KH-11- 7	7月16日	東京	8月 5日	東京	西部北太平洋	21



塚本 勝巳 教授  
第22回太平洋学術会議 畑井メダル  
(Shinkishi Hatai Medal)

受賞題目  
北太平洋における魚類の回遊に関する研究への貢献

横山 祐典 准教授  
ソロプチミスト日本財団賞 環境貢献賞

受賞題目  
喜界島サンゴを用いた古環境解析と島の小学校での出前授業等による科学教育促進

蒲生 俊敬 教授  
財団法人海洋化学研究所  
第26回海洋化学学術賞(石橋賞)

受賞題目  
観測にもとづく海底熱水活動および海洋環境変化の地球化学的研究

伊藤 純至 特任研究員  
日本気象学会 2010年SOLA論文賞

受賞論文  
"Large Eddy Simulation on Dust Suspension in a Convective Mixed Layer", SOLA, Vol. 6, 133-136. (2010)

## 書き手自身による新刊紹介

Coastal Marine Science in Southeast Asia-Synthesis Report of the Core University Program of the Japan Society for the Promotion of Science: Coastal Marine Science (2001-2010)

Edited by Shuhei Nishida, Miguel D. Fortes, Nobuyuki Miyazaki  
250×180mm・315頁・TERRAPUB・2011年3月刊  
非売品・版元サイト(<http://www.terrpub.co.jp/>)から閲覧可



東南アジアの沿岸は世界の海の中で最も生物多様性が高いことで知られ、また豊かな水産資源の供給源として、沿岸諸国の経済や国民生活を支えています。いっぽう、汚染物質の流入や漁業・リゾート開発などにくわえ、地球規模の気候変動による環境の悪化が深刻な問題となっています。この本は日本と東南アジア5カ国の研究者が協力して、この海域の生態系を総合的に調査した10年間のプロジェクトの成果をまとめたものです。沿岸の物理過程、有害藻類の生態、生物多様性、汚染物質についての研究成果のほか、トレーニングコースやフィールドガイドの出版などを通じた知識の普及や教育活動についても紹介しています。入手ご希望の方は国際連携研究センター(西田)までお知らせ下さい。(西田 周平)

### 研究人生よもやま話 ①

#### 昔話で恐縮ですが……

大気海洋研究所の研究者たちが自らの研究生活について、反省談、失敗談、今だから言える話、などなどを後進に資することを期して語ります。

1984年、私がM1だったころの日本は、高度成長とバブル経済の狭間の中でぼかっと空いた結構平安な時代だったと記憶している。そのような中でも海洋研究所は何やら厳しい雰囲気があり、「教育しないことが教育だ」と言われ、分からなければ「頭が悪い」の一言で片付けられた。ゼミではぐっと涙を堪えつつ、ドクターの学生、ましてやOD(オーバードクター、和製英語、今で言うところの無給PD)は教授よりも偉そうで恐ろしかった。研究発表しようものなら「何が面白いの?」と無慈悲な質問をする鬼がいて、「いつか言葉を返してやるぞ」とつぶやいて堪えたものであった。

一方で、あの時代、説教という言葉がまだ生きていて、飲めば説教が始まったものである。もっともその後には酔っぱらいの介抱があり、新宿南口へのお忍びのお使い、しけ込んでしまった先輩の呼び出し

などの理不尽な経験をし、白鳳丸外地寄港地での所業を見るにつけ、M2になるころには説教の根拠が瓦解しこちらが諫言をする立場になった。「お言葉ですが……」という切り出しを覚えたのもこの頃である。今となっては表と裏の洗礼によるトラウマから抜け出せず、お会いすると緊張する先輩諸氏がまだまだ多々おられるが、ゼミでの身も蓋もない物言いが懐かしく感じる今日この頃である。つまり、あの時代、皆、生意気で自分勝手に破天荒であったが、周りをよく見てよく勉強をしていて、どのような立場の者ともよく意見を戦わせていた。

2011年、今ほどのような時代なのだろう。口角泡を飛ばす議論をしなくなったような気がする。人は皆優しくなり、私自身も丸くなったとよく言われる。ゼミの出来が悪い学生に「俺が出て行くか、来週やり直すか」と迫った助手時代は遠い昔である。優しく

なることは容易く、厳しくなることは難しい。しかし、優しくなるのは決して草食系の時代だからだけではない。学内・学会業務が多様化し、多数の事業を展開することが求められるようになり、今まであうんの呼吸で済ませていたことが済まなくなって事務作業に忙殺されるようになってきた。また、教育の評価が求められる時代に「教育しないことが教育だ」などと言えるはずもなく、丁寧な説明が必要となってきた。そうすると自然と人は優しくなるのであり、昔の教授はよかったなあとつくづく思うのである。

ともあれ、論争することは学生教育の一環なのであり、私はこれ以上丸くならないように努めつつ、学生諸君にも「楽しいキャンパスライフなど貰えらん」という気概で議論を重ねて研究に打ち込んでほしい。(木村 伸吾)



# Event Report

イベントレポート

## 「東京私立中学合同相談会」へのブース出展・講演

去る2011年5月8日(日)に、有楽町駅前の国際フォーラムにて、東京私立中学合同相談会が開催されました。東京にある160あまりの私立中学校のそれぞれが学校案内の展示をするもので、大気海洋研究所にブース出展と講演の依頼がありました。なぜ大気海洋研究所に？ それはこの相談会を単なる受験相談会にするのではなく、子どもたちに将来への夢をかき立てて欲しい、という主催者の意図からです。徳山英一教授による「海の底が揺れるとき」という講演は3月の大地震と津波の話でした。60~70名の親子が集まり、講演後も徳山教授に熱心に質問をする親子がいました。講演会場に持ち込んだ立体海底図も好評で、聴講者ははじめて見る海底の凹凸に驚いていました。展示ブースでは大気海洋研究所のゴマフアザラシのはく製が超人気。



展示ブースでは生物のはく製や標本が人気

子どもたちに海と空の魅力を多少とも味わってもらえたのではないのでしょうか。  
(木暮 一啓)



新入生歓迎会では、エントランスホールを飾り付け、壁面にスライドを映写しました

## 新入生歓迎会

2011年5月13日(金)に1階エントランスホールにて新入生歓迎会が開催されました。今年度の新入生の参加者は30名でしたが、元気ある学生が多く、壇上で自己紹介をしてもらう場面では、歌や体を張ったパフォーマンスで会場を盛り上げてくれました。その他にも、大気海洋研究所内の部活・サークル紹介や、「お魚倶楽部 はま」による寿司の握り実演も行われました。また、3月11日に発生した東日本大震災から日が間もないことから、開会の際に所長の合図で黙祷を行い、参加費の一部を義援金として寄付しました。新歓後、新入生の方から「他分野の人と交流できて良かった」等の声を頂き、当初の目的である「新入生に楽しんでもらう」ことを達成できたと感じます。(大里 和輝)

## 「日本地球惑星科学連合2011年大会」へのブース出展

2011年5月22~27日(日~金)に幕張メッセ

国際会議場にて開催された日本地球惑星科学連合2011年大会において、大気海洋研究所のブースを出展しました。パネル展示では、組織の紹介、進学案内、研究トピックスの紹介、国際沿岸海洋研究センターの被災状況と復興への取り組みの紹介を行いました。また、深海魚の生物サンプル展示、気候システム系の研究のPCプロジェクター上映、所員の関わった書籍展示、ニュースレター・要覧等の配布を行いました。学会関係者の見学だけでなく、初日には「高校生によるポスター発表」が開催されており、それに参加した高校生、高校教員の方々の見学も多く大変賑わいました。(芦 寿一郎)



パネルの説明風景

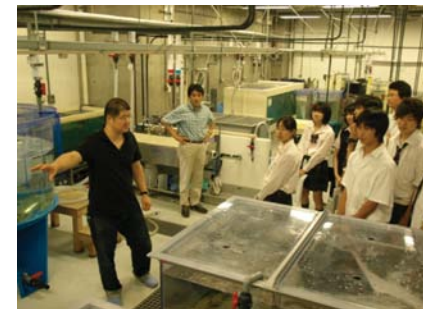
## 進学ガイダンス

2011年6月4日(土)午後1時から、大学院進学希望者を対象とした毎年恒例の進学ガイダンスが開催されました。最初に講堂にて研究所紹介、各部門の活動紹介、大学院入試案内があったあと、会場を会議室と講義室に移し、パネルを用いた研究室紹介が行なわれました。終了後は研究室訪問タイムとなりましたが、今年はさらに初の試みとして、通常は平日夜に行われている所内ビールタイム「ふらっとアワー」が催され、訪問学生と所員の交流が暗くなるまで続きました。今年も22の大学から63名の参加者があり、熱心な勧誘を受けていました。(岡 英太郎)



大学院進学希望者へ各部門の研究内容をパネルで紹介

## 柏の葉高校からの見学受け入れ



見学の人気スポット、飼育実験室

2011年6月13日(月)に、千葉県立柏の葉高校の生徒30名と引率の先生2名が柏キャンパス(柏図書館、宇宙線研究所、大気海洋研究所)の見学に来られました。柏の葉高校からの見学は昨年度につづき2回目です。まず講堂でスライドショーにより研究所の概要を説明しました。その後飼育実験室に案内したところ、生徒さんたちは目を輝かせて水槽内の魚たちを観察してくれました。結局、当所の予定時間を大幅に超えて楽しんでいただきました。実物の生き物たちの魅力に負けない講義をすることは至難の業ですね。(河村 知彦)

## 「たなばたイベント」と「ふらっとアワー」

大気海洋研究所の夏のイベントとして2011年7月7日(木)に「たなばたイベント」と定例の「ふらっとアワー」を合同で行いました。今年は3月11日の東日本大震災のため東大内においても歓送迎会からオープンキャンパスまで多くの行事が自粛・延期されましたが、厚生委員会では所員の健康と安全を願って「たなばたの夜の星」に願いをかけるイベントを開催しました。この企画をした際には、笹を7本用意しましたが、短冊を飾る場所が足りず、後ほどさらに7本を追加で飾りました。「たなばた」は子どものころのお祭りのイメージでしたが、用意した120枚の短冊もすべてなくなり、ふらっとアワーでは飾り付けられた短冊を鑑賞しながら、皆さん、楽しいひと時を過ごせたのではないかと考えています。(福田 祐子)



短冊には思い思いの願いごとが

## AORI スタッフ日誌④

所長秘書室

大気海洋研究所には、教育研究活動を支援するさまざまな職種のスタッフが勤務しています。このコーナーでは、スタッフの仕事を通して、研究所の活動を別の角度から紹介します。

所長秘書室は、大気海洋研究所1階の事務室奥で、所長室と事務長室の間にあります。

所長秘書室では、所長・事務長のスケジュール管理等の秘書業務、来客応対、所長室会議など所長室で行われる会議の手伝いなどを行っています。

中野キャンパス時代は所長秘書「室」はなく、所長室の中に秘書の机が置かれて小さな1枚のパーテーションで区切られたスペースでした。そのため所長室

での会議の際など、教職員の方々の声がよく隣から聞こえてきて、急なコピーや情報検索などの依頼にも対応しやすいなどのメリットもありましたが、内密な相談(?)の時には私は席をはずして、談話室などで待機していたこともありました。

柏キャンパスに移転してからは「所長秘書室」になったので「密談」の際に離席する必要もなくなり、また来客のためのスペースもあるので、急なお客様が来所されたときでも、以前のように少し離れた談話室へご案内するだけでなく、秘書室で座ってお待ちいただけるようになりました。

私自身は2003年より所長秘書として勤務いたしておりますが、当時は翌2004年の国立大学法人化などを控えていて、所長補佐会(現在の所長室会議)などでできりに意見交換がされていたのを覚えています。今後も所長はじめ所内の方々元気にお仕事できるような環境づくりのお手伝いのできたらと思います。(大久保 幸江)



来客をお出迎え。こちらで少々お待ちください



多忙な所長をサポートします

撮影/キベジュンイチロウ(有限会社/トコード)

## 人事異動一覧

\*特任研究員、技術補佐員、事務補佐員については省略。

### □ 教員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	新職名・所属(兼務職名・所属)	旧職名・所属(本務職名・所属)
H23.5.16	伊藤 幸彦	昇任	准教授・附属地球表層圏変動研究センター-海洋生態系変動分野	助教・海洋生物資源部門環境動態分野
H23.7.1	岩崎 渉	昇任	講師・附属地球表層圏変動研究センター-生物遺伝子変動分野	助教・大学院新領域創成科学研究科情報生命科学専攻
H23.7.1	小島 茂明	配置換	教授・大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻	教授・海洋生態系動態部門底生生物分野
H23.7.1	小島 茂明	兼務	教授・海洋生態系動態部門底生生物分野	教授・大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻

### □ 職員(常勤)

発令日	氏名	異動内容	新職名・所属(兼務職名・所属)	旧職名・所属(本務職名・所属)
H23.7.1	安部 秀明	転出	本部総合企画部法務課企画調査チーム係長	国際・研究推進チーム係長
H23.7.1	國京 毅明	転出	柏地区共通事務センター-施設係専門職員	施設・安全管理チーム係長
H23.7.1	清田 盟	転出	日本学術振興会総務部経理課係長	財務チーム主任
H23.7.1	飯塚 祐二	転出	本部社会連携部社会連携推進課	国際・研究推進チーム
H23.7.1	水津 知成	転入	国際・研究推進チーム係長	医学部附属病院管理課研究推進チーム係長
H23.7.1	黒須 玲子	転入	財務チーム主任	農学系経理課経費執行チーム主任
H23.7.1	原 尚子	転入	国際・研究推進チーム	新領域創成科学研究科契約係
H23.7.1	西野 真理	兼務	施設・安全管理チーム	柏地区共通事務センター-施設係



# 新スタッフ紹介

2011年4月に着任したスタッフを紹介します。

①氏名・所属、②出身地、③趣味、④抱負などひとこと。



- ① 下出 信次(兼務特任准教授・海洋アライアンス連携分野)  
 ② 和歌山県  
 ③ バイク・自転車(主にロード)いじり、猫と遊ぶこと  
 ④ 昨年度までは浮遊生物分野で研究員をしていましたが、今年度から縁あって海洋アライアンス連携分野に異動しました。中野の海洋研に来てから早5年、当初は気ままな独身生活が、気が付けば家族が、ヨメ、猫2匹、娘と増えました。



- ① 白井 厚太郎(助教・国際沿岸海洋研究センター沿岸生態分野)  
 ② 愛知県豊橋市 ③ 海に関する事いろいろ  
 ④ 徐々に古巣に戻ってきました。修士から学位取得までの約5年間、沿岸センター研究員時代の2年間、本当に長い間海洋研の皆様にお世話になりここまで育てていただきました。昨年度は1年間ドイツで研究をしていたので、大気海洋研究所になってからは、この4月が初めてで、柏キャンパスはまだわからない事だらけです。沿岸センターのメンバーとして、センターの復興に貢献していきたいと思っています。写真は昨年住んでいたドイツ・マイツの大聖堂です。



- ① 平澤 敏之(副事務長(総務担当))  
 ② 東京都北区  
 ③ スポーツ(特にテニス)、旅行、お酒  
 ④ スポーツ後の一杯が最高ですが、最近は運動をする機会も少なく……。新年会、花見、暑気払いなどを口実に飲みに行っています。今年は、東大勤続20周年目ですので、長期休暇?をいただいて、以前から行きたいと思っていたアンコールワット遺跡の探訪を実現したいです。



- ① 塩田 俊仁(副事務長(会計担当))  
 ② 東京都  
 ③ 散歩  
 ④ 健康維持のため、できるだけ歩く機会を作っています。新しい環境で皆さんと一緒に仕事ができることにたいへん感謝しています。微力ですが少しでも研究所のために寄与できればと思います。よろしく願っています。



- ① 岡部 友紀(総務チーム専門職員)  
 ② 山形県酒田市  
 ③ 野球観戦、旅行、カラオケ、韓流、ボーリングなどなど。  
 ④ 現在は、総務チームで仕事をしていますので、仕事を早く覚えるのももちろんですが、皆様とのコミュニケーションを大事にしたいと思っておりますので、よろしく願っています。週末は、大好きな北海道日本ハムファイターズの応援で、地方遠征などにもいき、楽しんでます。球場でのビールは最高ですね!!



- ① 武笠 まゆみ(図書チーム係長)  
 ② 東京都 ③ 以前は手芸や読書でしたが今はパズル解きと通勤時間にpodcastを聞くこと。でも一番の趣味は休日の昼寝。  
 ④ 理学系研究科では図書業務といっても総務的な仕事が多く、3年ぶりに本の整理を行っています。図書業務では資料の保存修復等にも興味がありますが、知識も技術も発展途上の状態です。家では猫を飼っています。家族のアイドル(女王?)として君臨しています。



- ① 浦田 雅子(経理調達チーム主任)  
 ② 新潟県長岡市  
 ③ 最近、週末は(…週末だけ)掃除、洗濯、料理に明け暮れています。家事が趣味?(今のところ…)。  
 ④ 工学部からこちらにきましたが、柏キャンパスは周辺の環境もよく、通勤時間も今までの半分になり、時間的精神的に余裕ができました。仕事は、共済及び給与関係等、日々勉強することばかりですが、少しでも早く、皆さんのお役にたてるように頑張ります。写真は9名と1匹同居家族を代表し、猫の「空(そら)」です。



- ① 竹内 誠(観測研究推進室・技術職員)  
 ② 岡山県津山市  
 ③ 料理、スポーツ  
 ④ 昨年までは近畿大学で地球化学(特に海洋)について学んでおり、今年度から観測研究推進室の技術職員として採用されました。まだまだ覚えることも沢山あり、先輩方の指導の下、日々精進する毎日です。一生懸命頑張っていきますのでよろしくお願いします。



- ① 平野 昌明(沿岸研究推進室・技術職員)  
 ② 岩手県釜石市  
 ③ 釣り  
 ④ 昨年度までは専門職員として2年間勤めて来ましたが今年度から技術職員となりました。まだまだ津波の爪跡が残る(大槌)センターですが、負けずに前に進もうと思います。知識や技術ではまだまだ力不足な所があると思いますが海洋研究の役に立てるよう頑張りますのでよろしくお願いします。



## 編集後記

東京大学総合研究博物館にて、特別展示「鰻博覧会—この不可思議なるもの EEL EXPO TOKYO」が開催中です。大気海洋研究所を中心としたウナギ研究チームが採集した世界初公開の天然二ホンウナギ卵や、産卵場所を目指して泳いでいく親ウナギなどを見ることもできます。公開に先立っておこなわれた内覧会に出席し、その展示内容の幅広さに感動してきました……(も)

【鰻博覧会】7月16日～10月16日/入館無料/開館10:00～17:00(入館～16:30)/

休館日:月曜日(ただし7/18、9/19、10/10は開館)、7/19、8/12～8/15、9/11、9/20、10/11

【東京大学総合研究博物館】文京区本郷7-3-1、03-5841-2802、<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

Ocean Breeze 第5号 2011夏

発行日/2011年8月20日 発行/東京大学大気海洋研究所 広報委員会・広報室  
 編集/西田睦(広報委員長)、小川浩史、芦寿一郎、小松幸生(編集出版小委員会)、佐伯かおる、渡辺由紀子、森山彰久(広報室)

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5 電話/04-7136-6006(代表) FAX/04-7136-6039 E-mail/kouhou@aori.u-tokyo.ac.jp URL/http://www.aori.u-tokyo.ac.jp  
 デザイン/クリエイティブアクトナゴヤ 印刷/クワックス

